

比良山麓石工鳥瞰図

Eco  
DRR

総合地球環境学研究所  
Eco-DRR プロジェクト

写真提供：大津市歴史博物館

デザイン：島内梨佐

発行：2019年3月

ねらい  
滋賀県大津市に位置する比良山系東麓では標高一、〇〇〇m程の山頂付近から急斜面が連続し、大小様々な河川が琵琶湖に流れ込んでいます。大雨が降ったりすると土石流や洪水が起こる危険性があり、山麓に暮らす人々は自然災害に対処するための様々な工夫を行って来ました。集落周辺の山や河川から産出される花崗岩やチャートなどの石材は、災害を防ぐための堤や水路、波除石のほか、シン垣、棚田の石積みなどに利用されてきました。こうした暮らしの中で自然の脅威と恵みに向き合ってきた姿を、江戸期の絵図、聞き取り調査から見えてくる石工の仕事を、お伝えしたいと思います。

比良岡七郎さん(九三歳)は、北比良の石工の親の家に生まれ、家には明治期から石工が使ってきた様々な道具があります。北比良では、一九六〇年代頃まで、薪や柴、石材などが街道や浜を利用した交易の中で商品として販売されてきました。比良岡さんは、石工が山から石材をどのように採掘し、運び出したのか、そして浜で加工して販売するまでの流れを丁寧に教えてくださいます。石工が使った石材については、「大雨が降った後、山へ行けば石は絶えず落ちていた。ここらへんは土質が砂や花崗岩だから崩れやすい。だからこそ石がよくとれ、加工も容易だった。」と言います。比良山麓の石材は、地元の人々の暮らしを支える大切な自然資源であり、石材を利用するための様々な技術も培われてきたのです。

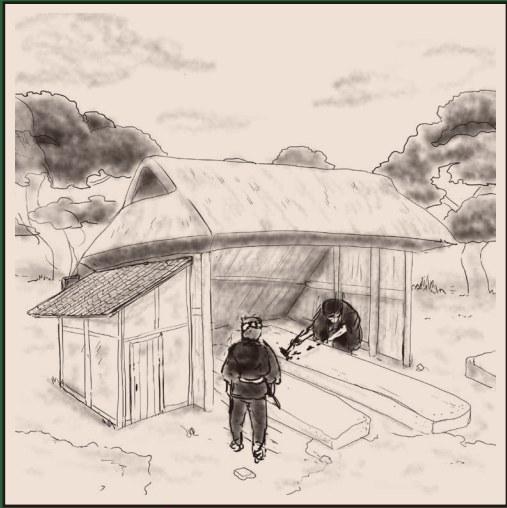


イラスト1 濱小屋の様子



イラスト2 加工の様子

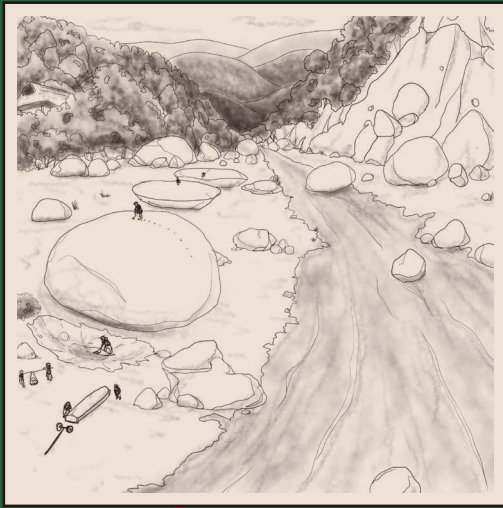


イラスト3 石切場の様子

石材の加工には、「のみ」「矢」「げんろう」「ふいご」など様々な道具を用いました。北比良では浜の近くに茅葺きの浜小屋を建て、加工専門の石工が仕事をしていました。南小松では集落内のあちこちに石屋小屋を建て、石工がそれぞれ仕事をしていました。

比良と南小松の境にある北谷と南谷と呼ばれる山の間には比良川が流れており、その奥から山が削れて大きな岩が露出していました。その奥に石切場と呼ばれる石を切り出していた作業場がありました。石工達は、その場所の日が昇る頃には山に登り仕事を開始し、石を落とす人、割る人、運ぶ人、加工する人など、分担して作業を行っていました。比良山麓にある花崗岩が川に向かって落とされると、川辺で待機していた石工が運搬できる大きさに石を割りました。

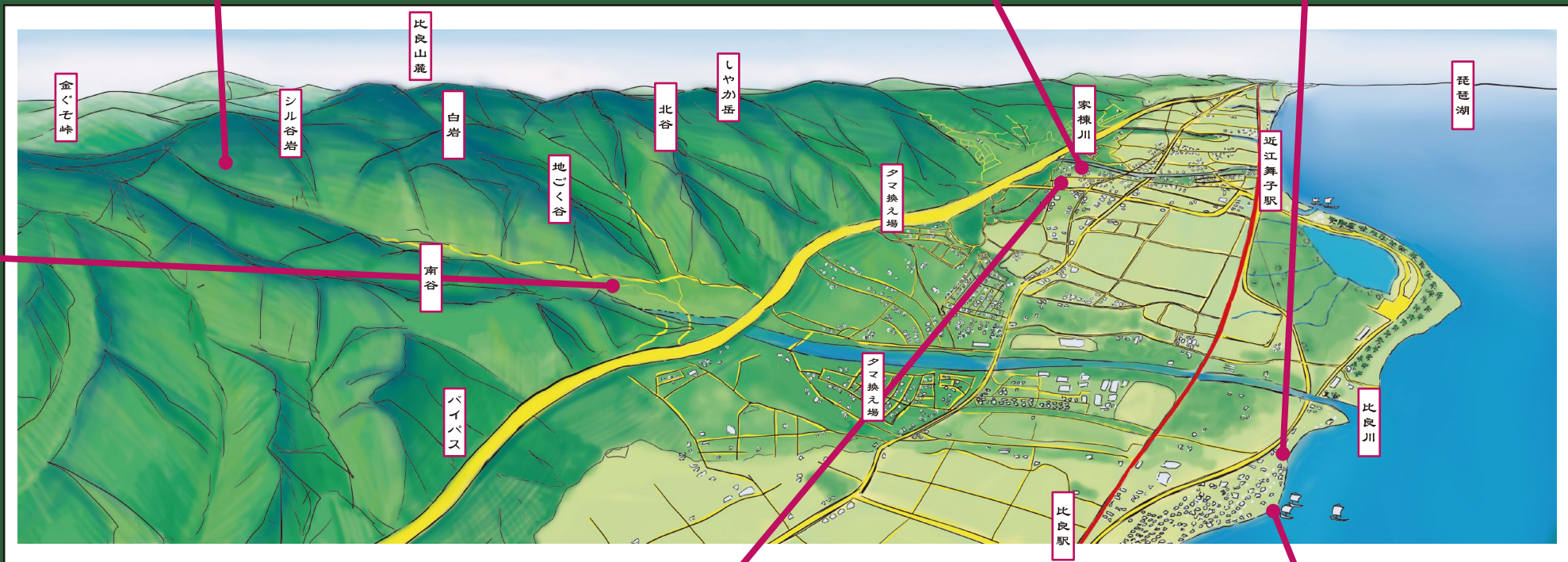


図1 比良山麓石工鳥瞰図



イラスト5 丸子船に石を運び入れている様子

山から切り出した石は、丸子船に乗せて琵琶湖対岸の地域(長浜、彦根、近江八幡、守山、大津など)や京都方面に販売しました。北比良では長石(ながいし)が多く、葛石や敷石、鳥居などに加工されました。南小松では丸石が多く、灯籠などの細工物、水鉢、石臼などを得意とする石工が多くいました。

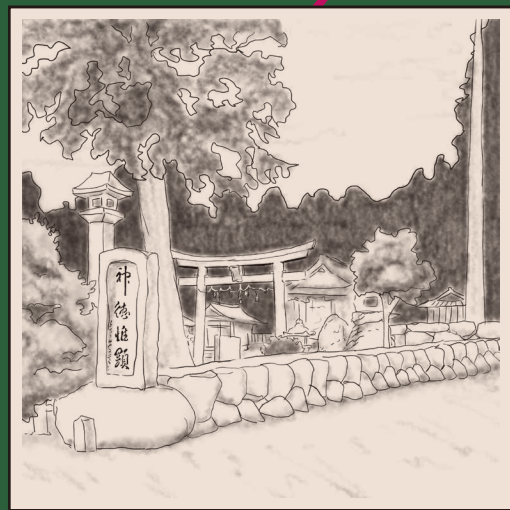
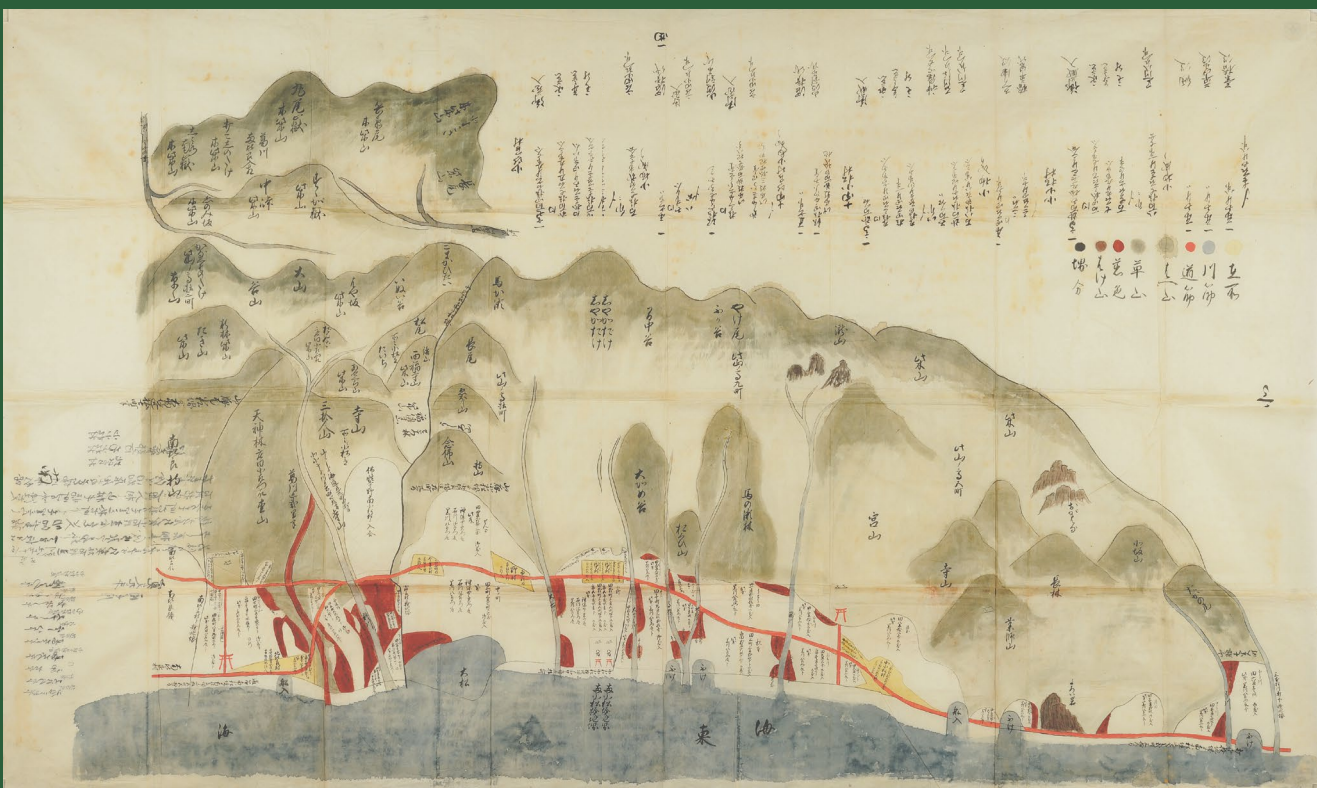


イラスト6 近江舞子駅近くにある八幡神社

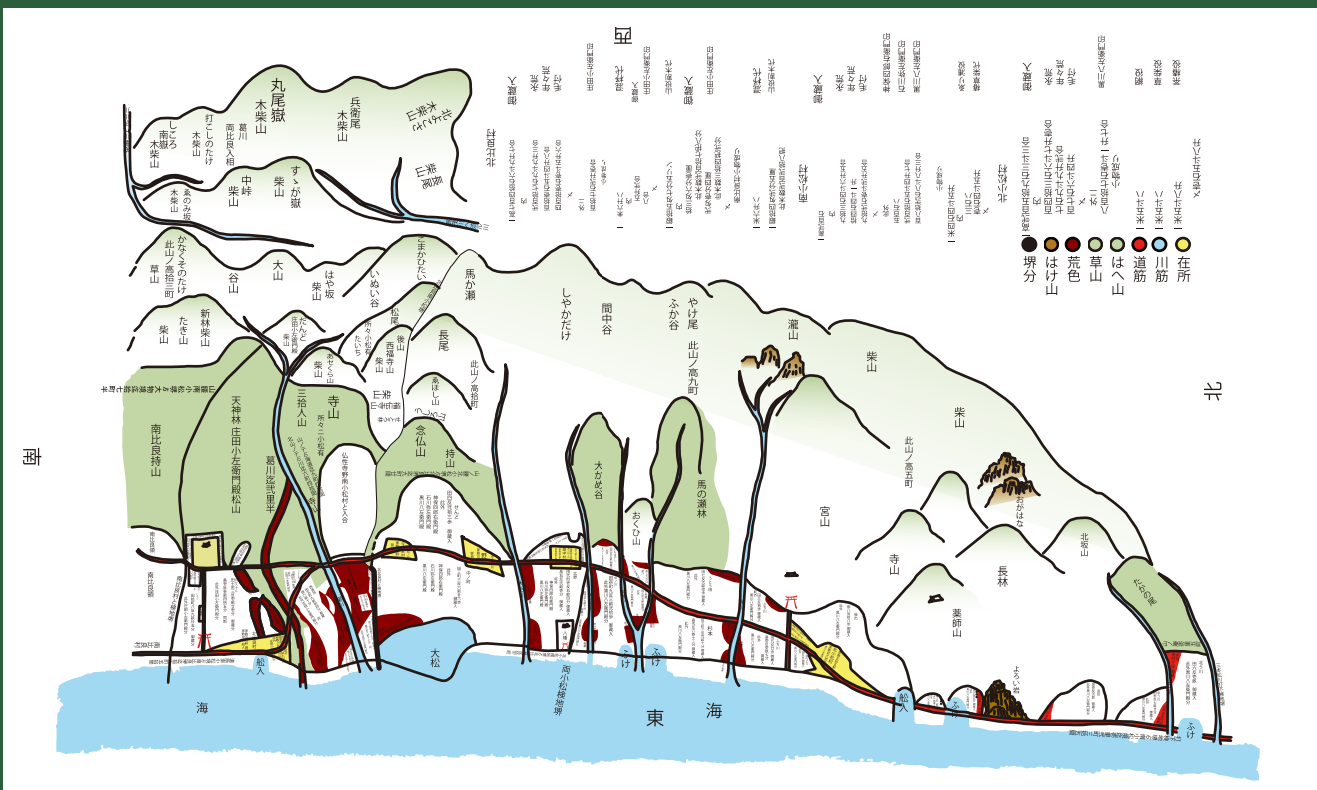
石材は、湖岸の波除石、川沿いの石堤、シン垣など洪水や土石流、獣害を防ぐための構造物、水路、民家の土台、棚田の石積み、庭園の景石など、様々な用途で利用されてきました。こうした石積みや加工品は、今でも比良山麓の暮らしの場のいたるところで見られ、地域固有の石の文化を形づくって来ました。南小松の八幡神社には、鳥居、石灯籠など石工達の作品が残されており、狛犬は地元の石工、甚八の作品で日本最大級の大きさと言われています。

イラスト4 山から石を選び出している様子

石を運ぶ時には、クルマ(木製の荷車)を使いました。クルマにはアカマツなどを使ったタマ(車輪)があり、時には五m程の長さがある石でも運ぶことが出来ました。坂道を降りている時には、中心を後ろに下げるときの小石を乗せて調整し、娘に石の上に乗ってもらったこともあったそうです。集落近くの平坦地になったところにタマ替え場があり、ここで大きいタマに替えて浜小屋まで運びました。



絵図 上「北小松・南小松・北比良村絵図」(北比良財産管理会蔵) / 下 トレース



この絵図は、寛文九年(一六六九)七月、幕府領であった当時の北小松・南小松・北比良村を描いたものです。裏書には、各村の庄屋・肝煎らが立会って念入りに、田畑・居屋敷・荒場・川筋、さらに持山・入会地(共有地)の詳細を書き上げたがあります。

その絵図面を細かくみていくと、各村の領主情報や村高・家数、また鎮守(神社)の位置や河川、街道情報を読み取る事ができます。一方で、山手に目を転じてみると、数々の山・谷にはそれぞれ名前が付されるところにも、草山・柴山など利用状況に就いた区別が併記されています。

さらに荒地や「はげ山」、水災害の情報もうかがえます。

また、土地情報だけでなく、北小松の「よろい岩」や「瀧山」(揚梅の瀧)、また近江舞子の内湖や舟入なども描かれています。

本図は三五〇年前の比良山麓北部に住まう石工を含めた人びとの生活空間を読み取る貴重な絵図といえるでしょう。